
洗練された第二言語コミュニケーションの探求 —「中間言語語用論」研究への誘い

水 野 晴 光

はじめに：

人間のコミュニケーション場面における言語使用の際の意味現象を研究の対象とする学問が、語用論（pragmatics）である。語用論といっても、その研究アプローチは以下のように多岐にわたっている。

- (1) 発話の遂行機能、適切性条件、間接的発話行為、会話の含意、等の解明に力点を置く研究。
- (2) 談話・テキストの展開メカニズムに特徴的な情報の流れ、結束性・一貫性、などを解明する研究。
- (3) 対人関係（または社会関係）の機能からみたポライトネスの解明を主眼とする研究。
- (4) 一次資料としての言語データの記述と分析に基づく対話構造、会話構造の解明などを主眼とする研究。
- (5) 民族学的な観点から見た対話分析・会話分析の研究。
- (6) 談話・テキストの背後に存在する言語主体の語りの構造とナラトロジー（物語論）の研究。
- (7) 二言語または複数言語の伝達手段による話し手・聞き手のコード変換のメカニズムに関する研究。
- (8) 異なる分化・社会的な背景をもつ伝達者による異文化間コミュニケーションの諸相に関する

る研究。

- (9) 形式と意味の関係からなる記号系の使用と解釈の効果の解明を主眼とする修司的研究。
- (10) 談話理解、対話理解を可能にする話し手、聞き手の知識構造、情報構造のモデル化に関する研究。

他方、言語研究の暗黙の了解事項として、「単一コード・モデル」と「閉鎖体系モデル」がある。前者は、言語が本質的にコミュニケーションを目的とするかぎり、そのコードは当然、言語集団ごとに単一でなければならないという公準であるが、現実の私達の言語生活は、同じ個人であっても、職場で話すことば使い、友人との会話のことば使い、家庭でのことば使いなど、実際には多数のコードの複合の上に成り立っており、日常のこととしてたえずコードの探知と変換を行なっている。後者は、言語コードの体系そのものが、さまざまな場面での言語使用を前提にして合理的にでき上がっているというものである。近代言語学は、どの学派も、言語のもつこのような体系性を前提に、言語行動の全体性を等閑視してきた。しかし、音声や文法や意味上の統一的説明を与え得るものは、言語行動の心的パターンの共通性以外にはない。とりわけ、言語研究における「単一コードモデル」と「閉鎖体系モデル」は、言語コミュニケーション

ンにおける意味研究の発展を阻害してきたことは否めない。

さらに、ソシユールはラング（音声、文字などのコード）とパロール（言語活動）の区別を確立し、ラングの研究を優先すべきことを主張した。その結果、今日、ラングの研究は発展したが、パロールの研究は立ち遅れており、とりわけ、言語運用の過程全体を把握する一般理論の構築が急務となっている。

●中間言語研究の沿革

第二言語習得の分野におけるこれまでの研究の多くは、第一言語との比較や、形態素の習得順位、及び習得の道筋や第二言語の普遍性に関する抽象的なレベルの研究により多くの比重が置かれ、教育実践面の研究は極めて少なかった。

四半世紀以前からこの分野では、言語習得におけるエラーの重要性が認識され、多くの研究が行われてきた。まず、言語対照分析は、学習者の困難点を説明することに貢献したが、エラーを言語学習の負の要素とみなし、外国語学習における母語の干渉を強調し過ぎた。やがて、その理論的基盤であった行動心理学に対して、1960年代後半にノーム・チョムスキーが異議を唱え、エラーの原因がL1の干渉以外にも存在することが明らかになると、研究の主流は次第に誤答分析に移っていった。しかし、言語対照分析に取って替った誤答分析にも、その後多くの問題を孕んでいることが指摘されるに至った。

すなわち、言語対照分析が、学習者のエラーを排除すべきものとしてネガティブに捉えたのに対し、誤答分析は、エラーを言語習得に必然的なものとして高く評価したが、①両者は、エラーの一断面に過ぎない静的なプロダクトのみを分析の対象としていた。その結果、②学習者の心理過程で連続的に発達し、状況によってさまざまに変化する可能性をもつエラーの実態を正しく把握できなかった。また、③その研究も研究者の一方的な視点で行なわれ、④学習者がその場の状況を考慮して、あらかじめエラーとなる表現を避ける回避現象なども分析の対象から外されてしまった。しか

も、⑤データ収集の点で科学的な厳密性に欠けるものが多かった。さらに、⑥目標言語の困難点の原因も明らかにされなかった。

●中間言語分析の方法

第二言語習得の分野では、これまで定期観察による縦断的研究の成果がかなり集積されてきてはいたが、それらのデータの多くは主観的要素があまりにも濃厚なため、その結果を一般化できなかった。また、そのデータの採集には時間がかかり過ぎる上に、被験者達のプライバシーを考慮すると、教室のような場面で、成人集団を対象にしたデータ採集は極めて困難であった。そこで、水野（Mizuno, 1985）は、言語対照分析と誤答分析の長所を取り入れ、かつ両者の短所を補完するとともに、データ収集の点でよりメリットの多い横断的研究がもつ短所を統計学的に補強し、その多くの長所を活用して、第二言語習得研究の病理学的アプローチとして中間言語分析法を提唱したのである。

この分析法では、①学習者のエラーは、学習者の背景に拘らず、基本的には類似しており、学習者の言語は同じ中間言語のプロセスを辿るというS. P. コーダー（1967）の主張を前提に、②目標言語の初期から末期に至る全習熟度レベルの被験者を含むサンプルを少なくとも上、中、下の3レベル（各レベルのN \geq 500）に等分し、判断テストと産出テストのデータを統計処理する。したがって、横断的に入手したこのような大サンプルのデータは、一個人の言語発達上のプロセスを表すものと見なし得る。その結果、③このデータから中間言語の発達プロセス上の潜在的なエラーの動態（出役）を客観的に把握して、病理学的にそのエラーの成立と経過の実態を比較的短期間に把握することが可能になる。また、とりわけ化石化のように、④中間言語の発達プロセス内に執拗に残るエラーの原因の解明も可能になる。しかも、このアプローチは研究者と学習者の双方向の視点を重視するため、客観的なエラーの診断が可能になる。さらに、⑤隣接諸科学の知見を援用してマルチレベルの仮説検証を行なえば、これまで化石化と見なされていた項目に光を当てるとともに、⑥指導

上の具体的な指針を引き出し、⑦普遍妥当な第二言語習得理論を打ち立てる事を可能にする。

●中間言語分析の意義と将来の展望

筆者はこのアプローチのモデルケースとして、英語冠詞に関する中間言語分析を行なった (Mizuno, 1986~1999)。その結果、日本人英語学習者は、上級レベルになっても英語冠詞の使用に自信がもてないという実態が判明した。しかも、その原因が意味・語用論的知識の欠如に起因することも明らかになった。この知見は英語冠詞の指導のみならず、英語教育の指導一般に対する貴重な示唆である。それゆえ、中間言語分析の成果は、第二言語教育の指導上の歪みを是正する。一方で、今後隣接する諸科学の知見を援用して、中間言語

分析を推進すれば、第二言語に関する指導上の有益な知見が豊富になり、その結果、それらの知見が外国語教育の向上に著しい貢献をすることは間違いない。

さらに、今後益々増加すると考えられる中間言語分析による語用論研究が、第二言語学習者の中間言語発達の解明と合わせて、第二言語コミュニケーションの過程全体を心的過程として統一的に解釈することができれば、言語理論の研究に対する貢献も、応用的諸分野への貢献もはかり知れないほど大きい。

最後に、今年度からスタートする私達の中間言語語用論共同研究プロジェクトに、より多くの有志が参加されることを期待する。
